

維新史 回廊だより

第6号
平成19年
(2007年)
12月発行
(年4回発行)

発行所 山口県環境生活部文化振興課

山口県山口市滝町一番一号 電話〇八三一九三三二二六二七

◇はじめに◇

いつも「維新史回廊だより」をご愛読いただきありがとうございます。今回は、萩博物館で十二月十六日まで開催されました松下村塾開塾一五〇年記念展「長州男児の肝っ玉 く松門四天王と桂小五郎」で初公開されました「吉田松陰先生絵伝」を御紹介いたします。解説は、萩博物館研究員の道迫真吾さんです。

◇收藏資料探訪（萩博物館）◇

吉田松陰先生絵伝

形状 折本・帙入り、タテ二一・一×ヨコ三〇・三センチメートル
作成 明治時代後期〜大正時代

○松下村塾は、今年が開塾一五〇年ということですね。

松下村塾の創始者は、厳密には吉田松陰の叔父の玉木文之進です。しかし、一般的には、松下村塾といえば吉田松陰が主宰したものを指します。で、松陰が主宰した松下村塾の開塾一五〇年ということになります。

松陰は、安政四年（一八五七）十一月二十四日の夜、赤間関（下関）付近を周遊していた塾生の松浦松洞しょうどうに宛てて書いた手紙に、「久保氏の新塾は果して本月五日を以て開けり」と述べています（「丁巳幽室文稿」中「松浦無窮に与ふ」、「吉田松陰全集」四巻、山口県教育会編、大和書房、一九七二〜七四年所収）。

ここで松陰は、実家の杉家宅地内にあった小舎を改修して得た八畳一室の塾舎を、「久保氏の新塾」と記していますが、このことは松陰が幽囚中であつたことに関係しています。つまり、名義上は松陰の外叔の久保五郎ごろう左衛門を主宰者としていましたが、実質は松陰が新設した松下村塾を指しているのです。

そして、「本月五日」とあるのは、安政四年十一月五日ということですから、これをもって開塾日と見なしているわけです。

ただし、ここで注意しておきたいことが数点あります。それは、松陰がまだ杉家の幽囚室で過ごしていた安政三年（一八五六）三月に、「塾生第一号」とも呼べる高洲滝之允たかすたきのじょうらに対して『孟子』の講義を行い始めていることや、「四天王」の一人に数えられる吉田稔磨としまろの入塾日が同年十一月二十五日とされることなどです（海原徹『吉田松陰と松下村塾』ミネルヴァ書房、一九九〇年）。

これによつて、松陰が塾舎に移る前から、すでにその門を叩く者が続出していることがわかります。したがって「開塾一五〇年」というのは、松陰が新しい松下村塾の塾舎に移ったことだけを根拠にしているというのが実情です。

このようにあいまいな点の多い松下村塾ですが、おもな動向を簡単にまとめると次のようになります。

安政三年三月、松陰は杉家の幽囚室において高洲らへの指導を始め、事実上の松下村塾を開きます。

同四年十一月、八畳一室の塾舎に移りましたが、さらに塾生が増えたため十畳半の部屋を増築し、同五年三月に完成させます。同年七月には、長州藩が正式に松陰の家学教授を公認しますが、同年十二月、藩が松陰を野山獄に投じたことで、塾での指導に終止符が打たれました。



松下村塾（萩市椿東）

○この資料は初公開ということですが、収蔵された経緯を教えてください。

「吉田松陰先生絵伝」（以下「絵伝」という。）は、明治時代に長崎造船局の初代局長を務め、松陰門下最後の生存者としても知られる渡辺蒿蔵（一八四三〜一九三九、在塾時の氏名は天野清三郎）の曾孫である渡辺寛氏から平成十六年（二〇〇四）に萩市に寄贈されました。松下村塾ゆかりの人物の子孫により今日まで伝えられたこの資料が、「開塾一五〇年」という節目の年に初めて世に出るのは、真に意義深いことといえるでしょう。

○絵伝は、いつ、誰が描いたのですか。

「絵伝」を描いたのは、名は不明ですが、蒿蔵の実兄で「奇陳」と号した人物です。蒿蔵に「小五郎」と称する兄がいたことは間違いありませんので、同一人物かとも考えられますが、現時点ではそれ以上のことはわかっていません。なお、「絵伝」には十五枚の絵が収められていますが、蒿蔵の兄が描いたのは十三枚で、最後の二枚については、のちに蒿蔵の娘の八百が描き足しています。

体裁としては、ほぼA四判のサイズで折本の状態になっており、帙に納められています。描かれた時期は定かではありませんが、昭和元年（大正十五年、一九二六）に蒿蔵が絵伝の序文を認め、「家兄奇陳居士、嘗て松陰伝を読み感激し、其の状態を描写するを措く能ず」（原漢文）と述べています。これにより、絵心のあつた兄が、塾に実際に学んだことのある弟の蒿蔵から様子を聞きつつ、描いていったであろうことは想像に難くありません。なお昭和十六年には、蒿蔵の嗣子の世祐が跋文を記しています。

○絵伝には、何が描かれているのですか。

「絵伝」では、松陰の誕生から刑死後まで、十五の主要な場面が描かれています。目次は以下のとおりですが、目次の順番と実際に収められた順番とが異なる場合は、実際の順番を優先しています。また、カタカナは平仮名へ改め、へ〜内に私が適宜語句を補いました。

第一、誕生（是は山家の景）（生家）

第二、幼年素読を受る所（音読稽古）

第三、撃剣（剣術稽古）

第四、御前講（御前講義）

第五、硯を買ふ所（赤間硯）

第六、平戸葉山・山鹿を訪ふ

第七、江戸脱邸（脱藩して東北遊歴）

第八、下田（米国密航計画）

第九、獄（野山獄中で読書）

第十、松下塾（松下村塾の講義風景）

第十一、江戸へ出発（東送の幕命）

第十二、江戸白州（評定所で死罪宣告）

第十三、骨ヶ原（小塚原回向院墓所）

第十四、若林（遺骨を改葬）

第十五、村塾書庫・県社（萩の松陰神社）

このようにビジュアルに示された松陰絵伝、それも、当時の空気を肌で感じ取ることのできた人物によって描かれたものは、私の知る範囲ではほかに例を知りません。そうした希少性という意味だけでも、この「絵伝」はたいへん貴重な資料ということができます。しかし、もつとも重要なのは、渡辺蒿蔵らの関係者が残した、松陰及び松下村塾にまつわるエピソードを視覚的に補うことができるという点です。

○絵伝からどのようなことがわかるのですか。

いくつか事例をあげてみましょう。まずは、松下村塾での講義風景です。講義の様子については、これまで古文書やエピソード等から推測するしか方法がなかったのですが、写真1（目次の第十）によれば、左上に描かれた松陰が



写真1 第十、松下塾（松下村塾の講義風景）

塾生全員の方を向き、塾生同士が対面式に机を並べて座っていることがわかります。また、屋外には農作業を行う姿をした塾生が見え、右上には米搗き場が描かれています。

実際、塾での活動に関して、蒿蔵は次のようなエピソードを残しています（『渡辺蒿蔵談話第一』、『吉田松陰全集』十卷所収）。

・先生の講説は、あまり流暢にはあらず、常に脇差を手より離さず、之れを膝に横たへて端坐し、両手にてその両端を押へ、肩を聳かしてへ割注——元来瘦せたる人故に肩の聳ゆるは特に目だつ講説す。

・其の間、運動にとて一同外に出で、草を取り、又米を搗く等のことあり。

・先生の坐処定まらず、諸生の処に來りて、そこにて教授す。

これらを勘案すると、松陰がただ一方的に講義を行うのではなく、塾生一人ひとりのそばへ次々に移りながら手とり足とり教え、また時には、運動と称して屋外にまで教育活動が及んだことがわかります。さらには、絵に示された様子から推測すると、対面に座った塾生同士が議論を行っていたであろうことがうかがえます。

このように、蒿蔵が残したエピソードと「絵伝」、そして現存する松下村塾の塾舎を総合すれば、歴史的なイマジネーションを行うことが可能になってきます。要するに、「絵伝」は、現存する実物とエピソードとの間をつなぐものであり、また、それらを検証するための手がかりとしても活用することができるとは思います。

○ほかにはどのようなことがわかりますか。

次は、松陰の生家を描いた写真2（目次の第一）を見てみましょう。

松陰自身、「樹々亭」「山宅」な



写真2 第一、誕生（是は山家の景）〈生家〉

どと呼んだこの場所は、現在、萩市の史跡に指定されていますが、建物は現存していません。現地には、当時の間取りを示す旧宅の敷石が、後に住んでいた人物の記憶により復元されていますが、三畳の玄関に六畳二間、

三畳二間と台所、それに別棟の納屋と厩という質素な建物であったとされています（『萩の文化財』萩市、二〇〇五年）。

このように、敷石や文章などで推測するしかなかった松陰の生家も、「絵伝」によってかつての姿を思い描くことができます。茅葺屋根で、いかにも狭いという印象を受けますが、「樹々亭」という呼称のイメージ通り、樹木に囲まれた自然豊かな場所であったことがうかがい知れます。

ちなみに、ここに松陰が生まれたのは天保元年（文政十三年、一八三〇）八月四日です。この年の

干支が寅でしたので、松陰は「虎之助」と名づけられました。

それから、写真3（目次の第三）は、松陰にはあまりイメージのない剣術稽古の様子です。

松陰といえば、学問の人というイメージが強いのですが、文武両道が重んじられた長州藩の気風のなか、武術の稽古をまったくしなかったわけではないようです。ただし、柳生新陰流の剣術師範であった平岡弥三兵衛に入門を申し込みはしたのですが、学問のほうに優先されたため、ほとんど剣術の稽古をする暇がなかったというのが実情でした。

ちなみに、松陰は平岡から、剣術の稽古に時間を割く暇があるなら学問を高めるために時間を使いなさい、というような注意を促されたというエピソードも残っています（福本椿水『松陰余話』山口県人会、一九六五年）。



写真3 第三、撃剣〈剣術稽古〉

○「硯を買ふ所」という場面がありますが、これはどんなエピソードですか。

松陰は二十歳の嘉永二年（一八四九）六月から七月にかけて、藩命により長州藩の日本海沿岸の防備状況を巡視します。行程の一部は松陰の「廻浦紀略」（『吉田松陰全集』九卷所収）という日記により判明しますが、石州（島根県）境から赤間関（下関）まで見聞したとされています。

その際、写真4（目次の第五）のように、赤間関で名産の硯を求めたことが、松陰の手紙からわかります。

この手紙は「永訣の書」と呼ばれるもので、松陰が処刑される一カ月ほど前の安政六年（一八五九）十月二十日付けで、父杉百合之助・叔父玉木文之進・兄杉梅太郎に送ったものです。この手紙には、「私首は江戸に葬り、家祭には私平生用ひ候硯と、去年十月六日呈上仕り候書とを神主と成され候様頼み奉り候。硯は己酉の七月か、赤間関廻浦の節買得せしなり、十年余著述を助けたる功臣なり」というくだりがあります（『吉田松陰全集』八卷所収）。文中、「己酉」というのは嘉永二年を指します。松陰はこの手紙で、赤間関で買って以来、十年余り愛用してきた「功臣」すなわち硯を、神体（霊代）として祭ってほしいと父らに頼んだのです。

実際、杉家ではこの松陰の願いどおり、明治二十三年（一八九〇）に松下村塾舎の改修を行ったさい、松陰が愛用した硯と松陰の書とを土蔵に祭ります。こうして私祠として営まれたものが萩の松陰神社の起こりで、松下村塾に学んだ伊藤博文や野村靖らが神社を公に創立しようとする運動を起し、明治四十年、松陰神社が県社として創建されました。

ちなみに、今年十月十日の夜に、松陰神社のご神体が、仮安置されていた松門神社から、本殿のほうへと厳かに遷座したという報道があったのは



写真4 第五、硯を買ふ所〈赤間硯〉

記憶に新しいところです。このご神体こそ、松陰が愛用した硯なのです。

○絵伝から、当時の様子を具体的に想像することができまね。

時代の変遷とともに、吉田松陰は、「革命家」「思想家」「教育者」などと、様々に語られてきています。このため、私は、特に小中学生に対して、松陰をどのように伝えたらよいのか迷っていました。そうした時、まずはこの「絵伝」から入ってもらえば、子供たちにも親しみをもって、松陰や松下村塾について勉強してもらえるのではないかと考えるようになりました。なお、今回ご紹介した「絵伝」については、先般、展覧会に合わせて刊行した萩博物館編『松下村塾開塾一五〇年記念 吉田松陰と塾生たち』（松下村塾開塾一五〇年記念誌出版委員会発行）という図録に、十五場面全てを収録しています。ご関心のある方は、ぜひ、萩博物館ミュージアムショップ（〇八三八・二五・六四四七）にお問い合わせください。

※注 文中に引用した文献のほか、山口県立山口博物館編『維新の先覚 吉田松陰』（一九〇年）、山口県教育会編『松陰と道』（山口県教育会、一九九一年）、海原徹『松下村塾の人びと』（ミネルヴァ書房、一九九三年）を参考にさせていただきました。

萩博物館のご案内

所在地 萩市堀内三五五番地

電話 〇八三八―二五一六四四七

開館時間 九時から十七時（入館は十六時三十分まで）

休館日 なし

入館料 大人五百円 高校・大学生三百円 小・中学生百円

二十名以上の団体二割引、障害者二割引

ホームページ <http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/hagihaku/index.htm>

「あながき」第六号は維新の志士を数多く育て、維新の原動力となった吉田松陰の生涯を描いた絵伝について解説していただきました。ビデオやカメラもなかった時代においては、絵図が、当時の生活の実態を知る上で非常に貴重な資料になることがわかります。次号は三月発行の予定です。